
B R E A K

ぶみおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B R E A K

【Nコード】

N 3 2 7 4 B

【作者名】

ぶみおん

【あらすじ】

舞台は大阪。——不良は不良らしく

+ 00 「路地」

少年は虚空の空を見上げた。

「ツてえ！！」

一人の少年が倒れていた。少年は起き上がり、ヨロヨロと歩き出した。

ここは誰も通らないような路地だった。少年は路地を出た大阪のシンボルの食い倒れ人形が眼に入った。

「クソツ！！」

少年はボロボロの体で食い倒れ人形を蹴った。

少年が脚を抱えて唸っていると坊主の少年がやってきた。

「神田先輩！！大丈夫ですか？？ってかなんで食い倒れ人形が壊れてんすか！！」

坊主は神田先輩と呼ばれる少年より、食い倒れ人形の方が心配なようだ

バシッ

神田の蹴りが坊主のケツに当たった。「バー口俺の心配しろ！！」

神田は坊主の肩に腕をかけてズルズルと歩いて家に帰った。

+ 01 「出席」

「龍治！！起きなさい！！学校よ！！」

龍治の頭に母のうるさい声が鳴り響く。

「もう、起きてるわ！！」

半開きの瞼が重い。

龍治は入学式と言うことをすっかり忘れて家の階段を降りた。

「今日お母さん遅れるから御飯食べときゃ」

龍治の母は女で一つで龍治を育てているため仕事がいっつも厳しかった。

「知ってる」

龍治はテーブルの上に置いてある千円をくしゃくしゃにしてポケットに入れた。母がなんとなくカレンダーを見た、次の瞬間龍治が母に蹴飛ばされて家に出たのは言うまでもない。

私立武法高等学校の門を龍治が通ったのは、入学式が始まって30分の事だった。

「一学年、退場。」

音楽がなったちようどの時に龍治が体育館に着いた。

「すいません。道で歩いているとおばあさんが倒れていたので病院まで運んでいました。」

この軽々と嘘を口走った。先生は呆れたように列の最後尾に並ぶよう指示した。体育館を出ると、恐持てのヤンキーがこちらにガンを飛ばしてきた。

一年のクラスは全部で5クラスあり、定員30人だった俺は4組だった。教室には知り合いは一人しかいなかった。

「よぉー！！早速遅刻したんやー！！」こいつだ。

「別にいいだろ」

龍治は呆れたように言ったここは言えば頭の悪い高校だった。

「ほんとに龍治は昔と変わらないなあ」

「お前もな、健志」

どうやら龍治にしゃべりかけたのは健志と言っらしい

5分ほど健志と喋っているとハゲたおっさんがあらわれた。

「えーっと、ここの担任になった尾崎です。」

どうやら尾崎の話しを聞いているのは数人しかいなかった。

「はいさっそく出席取ります!!」

誰も聞いてくれないので、声を張り上げた。

「青野ゆうた」

「はい」

.....

「神田龍治」

「.....」

「桐島健志」

「はい元気でーす!!」.....

「南幸太郎」

「.....」

「ん??南はきてないんか??」

尾崎がキョロキョロして南を探した。尾崎が南を飛ばそうとした時。

教室のドアが開いた。

「どうやらお前よりもタチの悪い奴だぜ」

健志は龍治にしゃべりかけた。

龍治は鼻で笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3274b/>

B R E A K

2010年12月5日11時25分発行